海外通信

シアトルを訪ねて

Visiting in Seattle

金子 幸生

Yukio KANEKO

1979年6月生まれ

2002年東京大学工学部機械工学科卒業

■主として行っている業務・研究
・集束超音波の医療応用, 流体力学

■所属学会および主な活動

日本機械学会

■勤務先

東京大学大学院 工学系研究科 機械工学専攻 流体工学研究室 (松本・高木研究室)

(〒113-8656 東京都文京区本郷7-3-1/

E-mail: yukio-k@fel.t.u-tokyo.ac.jp)

はじめに

今や“イチロー”によって日本人に身近な存在となった街、シアトル。アメリカ西海岸の北側に位置するワシントン州にあるこの都市は、エリオット湾やユニオン湖、レーニエ山に囲まれていて、夏はハイキング、冬はスキーをしに訪れる人も多いそうだ。今回は、2月下旬から3月中旬にかけての2週間、シアトルにあるワシントン大学のとある研究室を訪れた。お恥ずかしながら今回が初の海外訪問だったので、荷造り一つをとっていろいろな大変であったが、そんな私が私なりにシアトルでふと感じたこと、印象に残っていることを書きつづてみようと思う。

CIMU (Center for Industrial and Medical Ultrasound)

この時期のシアトルの天候は1週間のうち3、4日は雨が降り、大半が曇りであるといった天候だと聞いていたのだが、到着した日は見事な晴天だった。日本を発つ前の私の想像では、シアトルの空港に着いたときには「ついにシアトルにやってきたんだー！」という興奮だとか緊張感を味わうんだろ、うな、と思っていたのだが、意外にも冷静でいる自分がいて少し驚いた。ただ、2、3日経った時、街を歩いていて、ふと「今シアトルにいるんだよ

な…」と少しずつ実感がわいてきて、心の底からじわじわと嬉しさがこみ上げてきたことを覚えている。

今回訪ねたのは、ワシントン大学にあるCIMU (Center for Industrial and Medical Ultrasound) である。ここは、私の研究テーマである超音波の医療応用の分野において世界的に有名な研究室であり、これまでに数多くの論文執筆、口頭発表をしている。40人ほどのメンバーで構成されており、中には物理学、数学を専攻している人もいれば、電気工学に精通している人もいるというように、多分野におけるそれぞれの専門家がいた。そして、一つのプロジェクトに対して比較的多い人数が関わっていて、各々の人が自分の担当部分を中心に責任を持って取り組んでいる、という印象を受けた。

アメリカの大学生

全体に言えることかもしれないが、まず第一に大学に来る時間が早い。CIMUのメンバーの中にも、朝7時にきている人もいた。その代わり、夜は早めに帰宅し、ディナーの時間をたいてつにしているようだ。実際、朝早くに大学にきてみると

結構すがすがしいもので集中もできるので、この習慣は日本に帰っても実行しよう!と思ったものである。そして現在、私がそれを実行できているかというところ、ご想像にお任せする。

研究室の部屋を出てすぐ側にユニオン湖があり、休息時にはコーヒ一片手によく湖畔に足を運んでいた。湖を目の前にしてボーっとしているのが格別に心地よかった。その研究室で私が発表することになっていたある日の朝、湖畔でブツブツと発表練習をしていたら、カモが2匹やってきて私のそばでウロウロしていたので、そのカモたちに発表を聞いてもらったのを覚えている。見ていて心とまされる、愛らしいカモたちであった。このような自然に囲まれた環境のもとで研究生生活を送ってみたい、とも感じた。

スペースニードルから見たシアトルの景観

ワシントン大学構内にて

Mike邸にてProf.Crum夫妻, Dr.Bailey夫妻とともに

今回の訪問でCIMUの実験室もいくつか見せてもらったのだが、まず実験装置の数の多さには圧倒された。一つ一つ実験装置を見て回っているときは、まるでどこかの遊園地のアトラクションを回っているような感覚で、わくわくしながら話を聞いていた。

研究発表、実験室見学の時以外にも、普段、部屋でCIMUのメンバーとお互いの研究についてディスカッションする機会を持つことができ、今後の自分の研究方針を立てる上で非常に役立った。みんな自分のやっている研究内容を説明するときは、とても嬉しそうに話をしてくれ、自分の作った実験装置を見せてくれるときも、それに対する愛着心が伝わってきた。研究以外でも、CIMUのメンバーのほうからフレンドリーに話かけてくれ、居心地のいい雰囲気を作ってくれたことには本当に感謝している。アメリカンジョークのツボも少しだけ分かった気がする。

滞在中、Dr. Michael R. Bailey邸にディナーに招いていただき、Prof. Lawrence A. Crum夫妻と食事をする機会があった。兩人とも論文でいつもお見かけする名前の方であり、今こうしてその方たちを目の前にして一緒に時間を過ごせるなんて、夢ではないかと思ってしまった。最初は少し緊張気味であったが、両夫妻ともとても優しい方々で、研究以外にもいろいろ面白いお話を聞かせてくださり、とても楽しいひとときを過ごすことができた。その日の晩は宿に帰った後もしばらく興奮が冷めなかった。

北西部の街、シアトル

ワシントン大学の近くにある“University Way”には、飲食店や生協などが立ち並び、学生が楽しめそうな店が並んでいる。滞在中は毎日のようにその通りを歩いたのだが、その雰囲気が好きでぶらぶらしているだけでも楽しかった。他の海外の地に行ったことがないので偉そうなことは言えないのだが、私にとってシアトルの街はすごく住みやすい環境だった。日本人が比較的多いということもあってか、日本とほとんど同じ雰囲気を感じることができ、妙な落ち着きすら覚えた。

食べ物については、私にとっては満足だった。シアトルの街には、多国籍料理の店が多く並び、日本食の店も結構ある。“量が多い”というイメージはあったが、時々そのイメージをはるかに超えるような量が出てくることもあり、なかなかスリリングであった。

週末には、ダウンタウンへ行ってあちこちぶらついたり、スペースニードル、美術館で楽しんだり、後にアカデミー賞を受賞することになる、映画“CHICAGO”を見たりと、朝から晩までとにかく行きたいと思いついた所を回ってきた。“CHICAGO”はProf. Crumに薦められて見に行ったのだが、今回同行した先輩と二人で大満足して帰ってきたのを覚えている。交通手段としては、シアトルではバスの路線網が発達しておりどこへ行くにもバスを乗り継いで行けるようになっている。ただ、私の場合、なぜかバスに乗ると

そのバスの醸し出す安ど感のせいか、すぐに睡魔に襲われてしまい度々乗り越しそうになったものである。というより、実際に乗りすごしていたのだが。

シアトルを発つ日の朝、天候はこの時期のシアトルらしく曇りであったが、ここで過ごせた日々の充実感と、この地を離れる寂しさとが入り混じっている自分の気持ちを見ているような気がした。

滞在を終えて

今回は2週間という短期ではあったが、その分内容がぎっしりと詰まった時間を過ごすことができた。毎日起こる出来事すべてが新鮮であり、いつも心はわくわくして、しかしながらしっかりと地に足をつけてさまざまなものを吸収できた日々であったと実感している。ゆったりとした時の流れを感じながら、自分自身を改めて見つめ直すいい機会にもなったと思う。最後のほうでようやくメンバーと少しずつ仲良くなり始めて、研究内容についても分かってきていただけに、まだまだ日本に帰りたくない、と正直思った。いつかまたこの地を訪れてCIMUのメンバーと共に研究することのできる日が来るのを夢見て、日々研究をしたい。

最後に、若輩者の私をシアトルに送り出してくださった松本洋一郎教授、そして暖かく迎えてくださったLawrence A. Crum教授、Michael R. Bailey博士はじめCIMUのメンバーに心より感謝申し上げます。